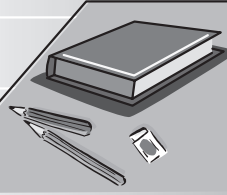


学生時代と図書館 88

—キャンパスライフの中心としての図書館の日米比較—

佐々木 豊



学生時代、大学のキャンパスで最も長い時間を過ごした場所は、疑いなく図書館である。小生の場合、日本の出身大学の学部・大学院に足掛け8年、留学したアメリカの二つの大学に7年半いたので、其々の大学の図書館で相当長い時間を過ごしたことになる。

日本の出身大学の図書館は、戦災を免れた赤煉瓦造りの趣のある明治期の建物の中にあり、国の重要文化財にも指定されている。入学した1970年代後半当時の図書館は、検索システムがまだ電子化されておらず、図書の検索は、細長い木箱にぎっしりと詰められた図書カード（著者名や書名、出版年等が記されている）を一枚一枚引き、読みたい本を時間をかけて探したものである。学生証を入口で預けて入る書庫内部では書架が林立し、ある種独特の匂いもした。ミシミシいう階段を上がって入る大閲覧室はいつも学生たちで混んでおり、なかなか席を確保できなかったことを記憶している。

一方、学部在学中にキャンパス内に地上6階、地下5階の図書館が新たにオープンし、学部生時代の後半と大学院生時代はこちらの新図書館の方をよく利用するようになった。この新図書館は電子化された検索システムを取り入れ、かつ全開架式であったので、毎日のように地下の書庫に“潜って”、資料や雑誌論文をコピーした。また、院生時代には、大学院生専用のキャレルのある4階で長い時間を過ごした。このフロアで勉強する院生たちの顔ぶれは毎日ほぼ同じなので、ある種コミュニティのような空間となった。各々のキャレルの横を通る際、“今日も、あいつ／彼女は頑張って勉強しているなあ”と思いながら、互いに切磋琢磨しあった。ところで、出身大学には、日本で最初に設立された図書館情報学科（1951年設立）があった。当時は文学部になぜこのような学科があるのか不思議に思ったが、その後、本格的な情報化時代を迎えたこともあり、大変人気のある専攻になった

と聞く。後に知ったことであるが、同学科は設立当初の数年間、アメリカ有数の財団であるロックフェラー財団の財政的支援を受けている。同財団が、“官立”ではない—私立大学に設立されたこの学科を支援した背景には、“官”の統制から自由な図書の普及が、自由な言論や知識・思想の伝播という民主主義的価値の促進に不可欠であるという考えがあったという。

さて博士課程2年目に、米国ブラウン大学に留学する機会を得た。同大学のメインライブラリー（米国の大学には機能分化した複数の図書館がある）の名前は、John D. Rockefeller, Jr. Library であり、財団創立者の御曹司の名前が冠されていた。これは同大の卒業生でもあるこの人物が、大学に多額の寄附をしたからである。この図書館は、普段は夜12時まで開館しており、学期中は課題に追われて勉強する学生たちでいつも賑わっていた。学生たちのほとんどがキャンパス内の学生寮に住んでいるので、このように遅い時間まで開館していても利用者が多いという事情もあるが、それでも、日本の大学生のキャンパスライフとの違いを感じたものである。深夜になると図書館で勉強を終えた学生たちを送迎バンで寮まで送り届けるサービスもあり、女子学生たちがよく利用していた光景を思い出す。続いて学んだラトガーズ大学でも、試験期間中は深夜2時まで開館しており（因みに開館は午前6時）、学生が集中して勉強する場としての図書館の役割を身をもって体験した。

このように、米国の大学では、学生たちは学期中、寮⇒授業教室⇒カフェテリア⇒図書館の往復運動をしており、図書館での勉強を中心に回る充実したキャンパスライフを4年間過ごす。学生生活はかくあるべき、と未だに思う次第である。

ささき ゆたか（教授・アメリカ政治外交史、対外関係史）